

## 第1回県立高等学校将来ビジョン検討会議議事録

日時：平成26年6月6日（金）10:00～12:00

会場：愛知県三の丸庁舎 2階アイリスルーム

〔教育長開会挨拶〕

〔事務局から委員紹介・開催要綱より趣旨確認〕

〔議長、副議長選出〕

〔議長開会挨拶〕

<議長>

それでは、議事に入ります。はじめに、次第の「3 議事（1）県立高等学校将来ビジョン検討会議等のスケジュールについて」、事務局より説明をお願いします。

〔事務局からスケジュール等の説明〕

<議長>

今年度4回会議を行っていくという、スケジュールの報告がありました。次回まで日程が決まっております。その後、10月と2月に会議があります。また、ワーキンググループについて本日の会議の後半で提案します。ワーキンググループで議論されたものが次回以降の本検討会議に提案されるという仕組みになっております。

なにかご質問がありますでしょうか。よろしいでしょうか。

それでは、このスケジュールで進めてまいります。

続いて、次第の「3 議事（2）基本計画の策定について」に移ります。

協議に先立ちまして、5月27日に行われました教育懇談会の報告と、昨年実施された県立高等学校教育改革準備委員会の報告を事務局からお願いします。

〔事務局から教育懇談会及び教育改革準備委員会の報告〕

<議長>

皆さんには今日初めて集まっていただきました。どういう方向性でどういうことをベースに議論を進めていけばよいかという観点から、2つの報告をしていただきました。教育改革準備委員会の報告は現在の高校の抱える課題や要望が現場からの声としてまとめられていると思います。それから教育懇談会の報告は、外部からみた高校教育に対する要望が、話題提供ということでまとめられていま

す。これらをベースに議論を進めてまいります。

ここまでのところで、何かご質問がございますか。

県立高等学校教育改革準備委員会というのは、何の準備をするためのものですか。どんな方が集まってどんなことが議論されたのですか。

#### <事務局>

本年度、高等学校将来ビジョン検討会議が開催されることが決まっていたので、この検討会議で議論するために、現在、高等学校にはどういう課題があるのかということを経済委員会の各課の課長と県立高等学校の校長が集まって話し合いました。

#### <議長>

教育改革準備委員会の報告は現在の現場の課題ということで比較的短いスパンの話であります。教育懇談会の報告は外部の方の意見ということで比較的長いスパンの話であると思います。

これらのことは、これからの議論の中に取り入れていきたいと思えます。

他にご質問はありませんか。

では、基本計画の策定に向けて、資料4の説明を事務局からお願いします。

#### 〔事務局から構成案の説明〕

#### <議長>

事務局の方で考えていただいた案ですが、抜けている点や重要な視点等ありましたらご発言ください。

「5 大幅に生徒が減少する地域における対応」とあります。18歳人口は愛知県では減少しないが、全国的には減少するということを個人的には知っていますが、何か具体的なデータはありますか。

#### <事務局>

愛知県の中学校3年生の卒業生数は平成26年度を1つの山として今後徐々に減少していきませんが、前回の高等学校再編整備の10年間の内、最も少なかった平成18年度を下回ることはありません。したがって愛知県全体として対応する必要はないと考えています。しかし、東三河地域では大きく減少します。詳細な資料については、「5 大幅に生徒が減少する地域における対応」についてご協議いただくときにお示ししたいと考えています。

#### <議長>

全国の18歳人口が今後10年間で10～20%減少すると言われていています。愛知県では幸い高校生の数は減っていないとのことですが、10年先はどれくらい減っているという推測をしていますか。

## <事務局>

平成 26 年度の中学校 3 年生の人口は、74,440 人で、10 年後には 70,100 人になると推計しています。

## <議長>

ありがとうございました。そうすると 5% ぐらいの減少ですね。小学校ではクラスの人数を減らしていますが、そういうことが高校にも及んでくる可能性があるのかと思い、質問しました。10 年後の予測はなかなか難しいのですが、人口減については明確に予測できるので質問させていただきました。他にいかがでしょうか。

## <A 委員>

基本計画の中にグローバル社会や地域で活躍できる人材の育成とありますが、この資料の中にグローバル人材とは何かという文部科学省をはじめとして様々なところで行われている定義を表にして並べていただくとよいと思います。文部科学省の定義が大震災をきちんと受けとめたものであるかどうか若干疑念がありますが、この後に出てくる定義は、より国力の源としての方向付けが強くなっていくということがあります。高校教育におけるグローバル人材という使い方と、あるいは大学、産業界における定義では微妙に異なることがありますので、例えば、グローバル人材を育成するといった場合に 10 年後の社会がどのようにグローバル社会になっているのかということを一程度見据える必要が出てくると思います。とりわけ、この 2、3 年、世界の状況は大きく変化しつつあり、我々はグローバル社会の荒波の中を闘い輝いていくというイメージを 10 年後に語るができるのかという問題もあると思います。5 月 27 日に行われた教育懇談会においても社会がグローバル化の中で急激に変化しつつある中で、どのような人材を育てるかという場合には、例えば、単に国際グローバルビジネスの舞台で活躍できるという人材像だけでなく、成熟した日本の中で、個人として世界に誇っていける全人的な教育という意味も含めたグローバル人材像が考えられます。この愛知県というところは多言語多文化で、いわば、「るつぼ」のような所であり、また、在日外国人に対する日本語教育が最も必要とされる、他の都道府県に比して断トツに要求されている地域であるという意味において最もグローバル化された地域であり、こうした地域だからこそ 10 年後のグローバル社会のグローバル人材というイメージをいろいろと議論しあいながら定義をつくるのもよいのではないかと思います。それを、高校教育の中に反映させていくといった場合に、その一例として差別という問題があります。差別というのは、例えば、先日の J リーグのサポーター達が「Japanese only」という横断幕を掲げて、大きな批判を浴び、サッカー協会の措置で、サポーター抜き試合が行われました。今後、こうした排外的な若者たちが数多く増えていくことが予想されます。このような中でグローバル社会の荒波を生き抜くというプラスの方向のグローバル人材教育という方向と、もう一つ、一般の若い人たちにおいて排外的なものが生まれにくいような仕組みを教育の中でしっかりと位置づけていく必要があるように私は強く感じています。本ビジョンは、こうした提示が盛り込まれていくとよいと漠然と思っています。今の段階では、時期尚早な発言になっているかもしれませんが、私の願いとしてはグローバル人材という言葉が一人ひとりの委員の皆さんの中で勝手に一人歩きしないように、愛知県としてどのような定義をもつのか、ということを考えてよいのではないかと思います。

### <議長>

今の発言は、次の議題の冒頭のところで議論するところかと思いましたが、大変重要なポイントだと思います。基本計画の中で書き込むかは別として、グローバル人材の議論のところで深めたいと思います。今のご発言の関連で申し上げますと、愛知県には外国人の子ども達がどのくらいの割合いるのかについては、資料に記載されていません。日本人の高校生としてグローバルな人材を育てるということには視点が置いてあるが、外国から来ている日系の方々が愛知県には多くみえると思います。これからグローバル化していくときに外国人への教育という視点は、この資料のどこに含まれていると考えればよいのでしょうか。

### <事務局>

今回5つの柱の中の4番目のところに生徒のニーズを踏まえたさまざまなタイプの高等学校の適正な配置という柱を立てております。不登校の生徒が本県においても大変たくさんいます。そして、全国においても外国人、日本語が十分に身に付いていない外国人の子ども達の存在が突出してあります。そうした子どもたちに、いかに教育の機会を確保していくかということについて、この4番目のところでご議論、ご意見を賜ればと考えております。

### <議長>

わかりました。どうもありがとうございました。他に、この資料4について、最初に説明がありましたが、今日の議論は最初のグローバル社会ということと、県立高校におけるキャリア教育の2点について議論し、残りの課題は次回に議論するようになっていると聞いています。もし、ご意見がなければこの枠組みで進めることについてご了承いただきたいと思います。

せっかくの機会ですので質問させてください。今、出ておりました4番の生徒のニーズということですが、現在愛知県の県立の高等学校の中で、途中で退学していくような生徒がどれくらいの割合なのかということと、この生徒達が、どういうニーズをもっているのか、もし、わかっていたら教えてください。

### <事務局>

全日制と定時制では状況が異なります。現在、愛知県では中退率は全日・定時制合わせて1.4%、1,000人のうち14人が中途退学となっています。全国では、平均が1.5%でありますので、若干低いのですが、全国と同じ状況があります。全日制だけでは1.0%、定時制過程につきましては14.3%にのぼります。中途退学者につきましては、さまざまな状況があります。学習面についていけないということもありますが、家庭の状況、進学意欲の問題もあります。そうした子ども達の学びの機会をどのように確保していくかということについても不登校と並んで大きな課題と考えております。

### <議長>

どうもありがとうございました。他によろしいでしょうか。このことは、次回に議論を深めたいと思います。それでは、グローバル社会や地域で活躍できる人材の育成という最初の柱について議論を

進めたいと思います。事務局から、関連の資料として資料5、資料6を準備いただいております。この説明をお願いします。

#### 〔事務局から資料5、資料6の説明〕

##### <議長>

ありがとうございます。これは、現在、愛知県や国のプログラムを使ってグローバル人材、個性、能力を大きく伸ばす施策についてのまとめではないかと思います。

この種のもは、いろいろな所からいろいろなプログラムが提供されており、文科省が打ち出したプログラムに応募するというのが習いとなってしまっているので、プログラムがあるたびに応募してしまうことがあります。国も、整理して出している訳ではなく、それぞれの部局のアイデアで出してくるので、現場の方は混乱するところがあると思います。こういったところは高校でも整理をしていく必要があります。この資料の理数系のところでも4種類ぐらい該当がありますが、これも互いに入り組んでいます。予算を出してくる元が違うため違うことを言うてくるのですが、大学側も高校から協力を求められると協力することになり、いろいろな窓口から依頼されることになります。これも整理しないといけません。今回がよい機会ですので、教育のための全体として相補的にしておかないと重なっているところもあります。例えば、スーパーグローバルハイスクールとスーパーサイエンスハイスクールとどこが違うのかとか、あいちスーパーイングリッシュハイスクールは、今のプログラムにどのように組み合わせられているのかなど、どのように整理しておられるのか、少し説明がいただけるとよいと思います。この方向性は、それらをまとめた形で方向を考えているということでしょうか。

##### <事務局>

県の事業も国の事業も多岐にわたっておりまして県として、整理できていないという点をご指摘の通りです。今後、県として理数分野でこうした力を付けさせていく、あるいは英語分野でこうした力を付けさせていくという方向性を考えていきたいと思います。

##### <議長>

先ほどのご発言にもありましたが、いろいろなレベルでのグローバル化のための教育があると思いますが、このスーパーサイエンスハイスクール、スーパーグローバルハイスクール、スーパーイングリッシュハブスクールはトップ層を刺激しようという部分ではないかと思います。日本は均一な教育と生活の状況があって、広く国際的に日本の置かれている状況や、海外にどんなことがあるのかということを知らない若い人たちが多くいます。これは、聞いた話ですが「日本とアメリカが戦争をしたことを知っているか。」「どちらが勝ったのか。」という会話が子ども達の間で交わされるという状況もあります。それが、全体のレベルかもしれない。そうした中で外国からいろいろな人が入ってきます。自分も外へ行かないといけなくなります。そういうときに全く何も知らずに無菌培養されているような状況ではなく、全ての高校生に対して何らかの形できちんと身に付けさせておくことが本当の意味でのグローバル化の大事な部分ではないでしょうか。高校の理科の先生に申しあげ

ることは、理科教育の大事なことは、大学入試に合格させることではなくて、文系も含めて全ての生徒に自然科学の論理的な思考を教えることです。今は、上の方だけ引っ張っている感じがします。

#### <副議長>

昨年からは、スーパーイングリッシュハブスクール事業が始まり、全県を12の地区に分けてそれぞれのところにハブスクールがつくられ、そこに、その地区の全ての学校の英語の先生が集まり地区の研修会を開催しています。昨年度から学習指導要領が改訂され、高校の英語教育は、基本、英語の授業は英語で行うことになりました。先生方も最初はできるのかという不安も大きかったと思いますが、この2年ほどの間にすごく変わってきました。ハブスクールは、愛知県教育委員会が独自にこの仕組みをつくられたと伺いましたが、地域にハブスクールをつくり、その地域全体で向上していこうという雰囲気が出ています。コミュニケーション重視の英語教育ということが言われていますが、ここ2年ほどの間に先生方が英語教育をやりながらコミュニケーション重視の活動を一生懸命やってみたら、実は、あまり中身の少ないことでは活動ができないことに気づきました。そこで、中身のあること、すなわち高校生の知的関心に訴えるようなアクティビティーをやってみたら生徒も熱心に取り組みますし、先生方も少しずつ英語で英語の授業を行うことはこういうことかとつかみはじめて、全体に力が付いてきていると思います。スーパーグローバルハイスクールはあまり実態がよく見えていませんが、県独自のハブスクールは全体が上がっていく気運の中で現場の先生方がとても努力しています。成果発表会を見させていただいたときも、英語教育はこのようにやっていると、きちっと人間教育になっていると、心強く思っているところです。先生方は大変な思いでやっていると思いますが、そのサポートは考えないといけないと思います。私自身が経験させていただいたところから述べさせていただきました。

#### <議長>

ありがとうございます。他にご意見はいかがでしょうか。今の県でやっている取組についてとか、ご質問があればどうぞ。

#### <B委員>

英語に関しては私も一部の優秀な人たちは、放っておいても自ら考える能力を身に付けていくと思います。できれば平均的な愛知県民が常に英語を話せる状況にもって行ってほしいというのが願いであり、愛知県に行けば、他の都道府県に比べて英語が話せるという状況にもって行ってほしいと思います。つい先日、2020年の東京オリンピックに向けて舛添知事は東京都民の全員が英語を話せるようにすると言いましたが、もっと早くに愛知県民が、英語を話せるようにもっていくということが重要ではないかと思います。スーパーサイエンスハイスクールなど、ここに書かれていることは基本的には個別の事業ですので、ツールを使いながら最終的に愛知県民は英語を話すことができるという状況にもっていくことを目指すとよいのではないかと思います。

#### <議長>

ありがとうございました。他に、ご意見はいかがでしょうか。

### <C委員>

英語教育全体の底上げは大切なことですし、今やっていることは否定しませんが、フェイズがいろいろあって、専門的な仕事に関する英語は話しやすいところがあります。工員でメンテナンスのために海外に行かなければならない人もたくさんいますが、話すことができます。スーパーサイエンスハイスクールでもこういったテーマがあれば、英語は使うスキルとして学びやすいと思います。ただ、コミュニケーションする力は英語を知っていても、できるわけではなくて、野茂投手のように日本語をしゃべらない人は、アメリカに行ってもしゃべりません。演劇などでコミュニケーションスキルを付けるというのは、どの学校のレベルでもできると思います。だから、そういうこともフェイズが上がってきたところでやっていただけるとコミュニケーションする力が生まれてくるのではないかと思います。

### <議長>

ありがとうございます。確かに、日本語でよく話す人は海外でも話します。話したいというモチベーションがあると話すようになります。あとは、語学は相手の背景になっているようなことを理解し、自国の経済や仕組みを問われたときに議論ができないようでは困るということだと思います。人間としてコミュニケーションしようと思うと、こちらのバックグラウンドとあちらのバックグラウンドがわかっていないといけないと思います。

### <A委員>

いろんなフェイズがあるというのはその通りであると思います。確かに専門領域での会話は楽です。ところが、次のフェイズに入ると、「とたんに何を話すの」という根本的なところでつまづいてしまうところがあると思います。そこで、次のフェイズで求められるというのは、月並みな言い方をすれば、自分自身を言うことと他者を知っているということになります。その場合の他者を知っていることは、ただ単に他者を知っているだけでなく、他者に対する一種の共感（エンパシー）という、（シンパシーとは異なる、シンパシーは同調してしまう、そこに自分自身はあってもなくてもよいが、）確実に自分自身を置きながら相手の立場になって考える力をもたないと本当の意味でのコミュニケーションが成り立ちません。そして、エンパシーを涵養して行く力が抽象的ではありますが教養ということになると思います。しかも、教養というのは単に人間が社会の中で生きていくツールとしての教養知だけではありません。一定程度経験に照らした知識、それぞれの世界のさまざまな地域での文化などを理解させるような仕組みが大切であると思います。今は、例えば、東京都が高校で日本史を必修にするということがあって、全体として日本史に対する傾斜が高くなると同時に、逆に、世界史に対する傾斜は低くなっています。外国語を仮に話すにしても自分達の文化のことを何も知らずに話せるのかとよく言われます。それも大事ですが、やはり世界のさまざまな地域に関する理解と自分自身の文化に対する理解が程よくバランスが取れていないと、独りよがりなものになってしまいます。世界と自分という関係性をしっかりと確認できること、これまで話をしてきたナショナルなものを理解すると同時に、もう一つインターナショナルなものを理解し、さらにグローバルなものを理解するという3つを整理し、高校教育の中では、グローバル教育の中に反映していただきたいと思います。事務

局からも説明がありましたが、どうやって若い人たちに、自分自身の将来に対して夢をもたせるかが重要です。夢をもっている日本人は非常に少ないという統計が出されていますが、この統計についてはいろいろな批判があります。日本人は、謙虚であるため、必ずしも自分自身が夢をもっているという事を公にはしたがるらないのでそのパーセント以上のものが必ずあると言われていました。しかし、日本人に夢がないということは、それだけ恵まれているということなので、必ずしも夢がないということをお否定的に捉える必要はないと思います。逆に、どういふ夢があるのかを発見させる仕組みをつくるのが大切です。夢はそれぞれ個人に即したものであるため、それぞれの個人がいかに、自分自身の中に可能性があるかという個性の発見ということをおしっかりやっていかなければならないのではないかとお思います。ロシア、アフリカ、中国の若い人たちに比べて、日本人に夢がなくても当然です。しかし、夢がなかったとしても、それぞれの一人一人が生きている場合に、夢がどこから生まれるかというおと、それは自分自身の個性に夢と信頼がもてるかということだとお思います。個性をどうやって発見させるか、それはグローバル人材をどうやって育てるのかの次にくる理数、芸術、スポーツにおける個性化の問題と直にリンクしているとお理解しています。

#### <議長>

ありがとうございます。他の方、ご意見いかがでしょうか。そうは言っても高校でなかなか全部は教えられないよということもあるかとお思うのです。

#### <D委員>

例えば私の学校は資料にありますように、スーパーサイエンスハイスクールということでお、もう 10 年以上にわたって国から費用をいただいて、先進的な理数教育を進め、それなりの成果を出しているとお考えています。しかし、最近、校内でときどき議論をするときに、昨年度からイギリスあるいはアメリカの高校と交流する場を設けており、そこに派遣された生徒たちの感想を聞くと、確かに理数については興味・関心が高いのだけれども、今、現実の社会の中で何が問題となっていて、それに対して日本人として、あるいは一個人として、自分がそれに対してどのように臨もうとしているかということについての、興味・関心や自分の考えがかなり乏しいと感じます。実際に出かけた生徒たちはそのことに気が付いて、もう少し自分たちの視野を広げなければということをお他の生徒の前でも語ってくれるわけですが、全体としては、資格取得だとか自分の人生の道筋を見つけるという親御さんの期待もあって、限定的にその道で成功できたらその方が就職も確実だということでお理数へ理数へと子どもたちが進みがちです。その分野で自分が興味・関心のあることについては、取り組んでいくのですが、そこからひとつ視野を広げてその問題が社会にどういふふうに関わっていくのかということについて十分に考える余裕というのか、場面というのか、そういうものがもっと工夫される必要があるのではないかと考えています。これは現実には、例えば私のところは定時制もありますが、定時制に今年入学した 30 数名のうちの 3 分の 1 は、親御さんが外国人です。ですからそれぞれさまざまな家庭事情を抱えています。現実には愛知の中で、さまざまな人が動き、さまざまな関わりの中で今の地域社会が支えられているわけですが、そのことについてそれぞれの子どもたちが、もう少し自分がその中でどういふ役割が果たせるかという、これから後に出てくるキャリア教育にもつながっていくとお思います。そういう意識付けのような学習活動も、学校として必要ではないかと考えております。

### <議長>

ありがとうございました。今のお言葉、中身の濃いお話だと思います。外国に送り出して、帰ってくると、自分の国がどうかということに目を向け始めるということはあると思います。外国に出すということは、先ほどありました自分を理解する、相手・他者を理解する、そういう意味が非常に深いと思います。この資料6に「高校生海外チャレンジ」や「イングリッシュキャンプ in あいち」が、異文化体験を通じて相互理解を深めるものですが、これは最初に私が申し上げた多様性を知る、つまり、日本の中だけを知るのではなく、外に行って初めて多様な生き方があるのだという経験を経ることが非常に重要ではないかと思います。

他の方、はいどうぞ、よろしくお願いします。

### <E委員>

少しまとまりのない話ですけれども、まず、スーパーサイエンスハイスクールや理科教育のことでつくづく思いますのは、教員がいません。例えば、2年ほど前に体育科の教員1人を採用するのに、80倍、90倍くらいの教員の応募がありました。社会科では40倍ぐらい、ところが理科だと7倍とか8倍くらいになり、そして数学科ではほとんど応募がありません。応募があっても文科系の大学でコンピュータの関係を勉強していた方です。本当に論理的な思考ということを根についたような形でもって教えてくださるかわかりません。3年前に私立高校の40代の非常勤教員が愛知県の県立高校の常勤講師に採用されるということがありました。教える人材をお互いに取り合う状況です。こんなことではなかなか裾野は広がらないどころか、崩れていってしまいます。

それから英語教育、グローバル人材の育成ということでは、海外へ送り出せばよい、接する機会をつくればよいと思います。例えば、小学生だったら、おそらく相手がアメリカの人であろうと気後れしません。楽しく現地の学校で学んで日本へ帰ってきます。それが中学生になり、高校生になり、私のような年齢になるとどうしても気後れしてしまいます。ある学校の例で申し上げますと、インターネット、スカイプを使って姉妹校とやりとりを、ニュージーランドやオーストラリアの学校と日常的に行っているのです、あまり言葉の障害を感じません。実際にその子どもたちがこの間来日して、その学校で2週間ほど過ごしました。そういう機会を無理矢理に、つくってしまえば意外と接してしまいます。立派な設計図をつくって、そして制度をつくってというよりも早道でいける部分があると思います。

もう一つは何が本人のコミュニケーションの力を養うのかわからないと思った例です。たった一つの例かもしれませんが、サッカーをやっていた学生が、地元の小さな部品を作る企業に入って、そしてタイの現地法人に派遣されました。そうしたら、非常に仕事ができるため、20歳代でインドネシアで現地法人の社長になったという話です。彼を教えた教員によりますと、彼は英語ができるとか、立派な日本語を話すことができるとは思えないけれども、大学のサッカー部を一から立ち上げた人物で、彼だったら現地の人とうまくやっていると書いていました。そういう場をつくってしまうと、先ほどのエンパシーほど高度なものではないかもしれませんが、人といかに付き合ったらよいかということはいろんなことを通じて学び取っていくことができると思います。

## <議長>

ありがとうございました。この件についてはまだまだ言い足りないことも皆さんおありだと思えますが、少し時間の方も過ぎてしまいましたので、この辺で閉じたいと思います。テーマの中で個性・能力を伸ばすというところは議論を進めませんでした。これは今までもずいぶん議論されてきたところだと思います。グローバルとは本当に目の前のことだということで、意見がかなり出てきたと思います。簡単に今の議論をまとめますと、対象というのは全体の学生を広く対象にしなければなりません。そういう意味では英語はハブスクールという機能がうまくいっているというご指摘がありました。もう一つ、先ほどご指摘にあったような、グローバル人材とはどういうものなのかということの一つは、コミュニケーション能力のスキルがキーワードになっていると思います。コミュニケーションするときのスキルもいるけれども、日本の社会を知り、相手の社会を知ることがないとコミュニケーションできないというご指摘がありました。そこからの発展で、他者を知る異文化を知ることが重要だろうということです。今、おっしゃられた海外に行くとか、そういうことを身につける場をつくるということが我々のできることではないかと思えます。

人間力という言葉が、本当は出てくるのでしょうか。この人がいるとうまくいくという人間力のある人っていますよね。どう育てるではなくて「場をつくる」ということが先ほどのご指摘ではないかと思えます。そういう中で芽が生まれてくればよいかなと思えます。

それでは次の話題に移りたいと思います。

つぎの話題は、この中では「県立高等学校におけるキャリア教育・職業教育の一層の充実」ということで、事務局で現在のキャリア教育とか職業教育についての現状の報告を資料7と8を使ってご説明いただきたいと思えます。よろしくお願いいたします。

### 〔事務局から資料7、資料8の説明〕

## <議長>

ありがとうございました。この話題については、高等学校におけるキャリア教育をいかにして進めるか、職業高校における学科改編をどのように進めるかということがサブテーマになっております。今のご説明の中では、中心は特に職業高校におけるキャリアの方向性をどのように進めるかということと、それとともに全日制の高校でインターンシップをして、特に「産業社会と人間」というような授業をするということです。この二つのことを分けて議論した方がよいかもしれませんが、最初の方の高等学校におけるキャリア教育をどのように進めるのかということから先に議論させていただいてよろしいでしょうか。このインターンシップは、期間というのはどれくらいの期間を想定しているのでしょうか。実際に今、進められているのはどんなことですか。

## <事務局>

資料8の3の課題のところにお○がいくつかありますが、3つめの○に「活動日数で見ると」ということがありまして、「1日のみの活動が34.6%」と、それから「複数日実施が課題」と載っております。普通科高校の場合ですと、例えば1日看護体験、保育園での実習体験、あるいは企業に出かけて、その企業で働いている人に付き添って一日仕事の様子を見たりするというジョブシャドウイング、こ

ういった1日のみのものを含めます。職業学科では、実際に製造業の現場に3日、あるいは5日といった期間出かけていって、そして実際に体験をするというような活動をやっています。そういったものを含めて21.7%という数字になっております。

#### <議長>

それでは例えばインターンシップをさせてほしいという依頼がきたときに、企業の方ではどのようなお考えでしょうか。大学の場合は入社してくれるかもしれないと思って対応するケースが多く、高校の場合では、やはり見学に来たかということが多いのではないのでしょうか。そのあたりのことについて教えていただければと思います。

#### <F委員>

大学生向けということになりますと、議長さんが言われるとお入り入社してくれるのではないかと期待もございまして、企業としてのCSRをやっているというPRにもなります。あるアンケートでは、企業の3分の2ぐらいが既にインターンシップを実施し、他の企業についても体制を整えたいという回答が多くみられました。私が経営者の方々とお話しした感触ですと、やはり、今、企業に入ってくる学生に対し、非常に危機感をもっています。よく言われるコミュニケーション能力とか実行力、行動力、協調性、チームワークなど、いわゆる社会人基礎力といわれるものですが、これが圧倒的に足りないそうです。そこをどうしたらよいのかというときに出てくる結論は、「社会人ってこういうものだ」と見てもらうのが一番よいだろうということで、その中で出てくるのが出前授業であったり、インターンシップであったり、もしくは、これは大学が中心になりますが、PBLであったりします。実際に会社が抱えているテーマを学生に与えて、それをグループワークの中でやってもらうというようなものですが、とにかく社会に出ると、どういう人が活躍していて、どういうことになるんだというイメージをもってもらうべきだという議論がよく出ます。これはおそらくレベルこそ違え、高校においても同じだと思います。高校生の娘をもつ親としての反省も含めてなんですが、圧倒的に大人を知らないと思います。学校の先生やバイト先の店長さんとかしか知らずに育ってきていて、大人というのはどういうところでどんなことをやって昼間活動しているのかということを知りません。そうすると仕事をするに対する魅力とか、希望とかを持ち難いのではないかと思います。今、大学に入っただけで「大学でどう学ぶか」とか、「キャリアをどう考えるか」という授業をやっていると思いますが、本来は高校である程度そのような基礎的なことをやっていた方がよいと思います。その手段としてはお話に出ていましたインターンシップの充実もそうですし、先生方のインターンシップ、これもなかなか難しいと思いますが、是非ご経験をいただきたいと思います。それから、最近ですと退職の年齢を迎えた方が地域にたくさんいらっしゃいます。まだまだ60過ぎ、65過ぎの方で元気で現役感のある方がたくさんいらっしゃいますので、そういった方々を、地域で英語教育をというお話もありましたように、地域の中で、その高校に生かしていただくというのも一つの手段ではないかと思います。

#### <議長>

ありがとうございました。おっしゃっていただいたことは非常に大事な視点だと思います。確かに

一点、社会を知ることが非常に大事な点だと思います。他の方で、実際に企業の方で、インターンシップを受け入れた方がもしあればお願いします。

## <C委員>

私の地元では商工会議所が高校と協議会をつくってインターンシップの受け入れを、経営者の方に理解してもらおうという趣旨でやっています。先ほど冒頭、議長さんが2025年くらいの10年先という、どういう社会かということをおっしゃって、人口のこともおっしゃいましたが、人口減だけでなく、人口の中の割合というものが相当変わってくると思います。2025年ぐらいになると、20%以上の人が60歳以上になりますし、団塊世代の人は2025年にはみんな75歳以上の後期高齢者になります。そういった社会の中で「生き抜く力」ということを学校教育でやろうとしているわけですから、その社会でそのようなことを想像しながら考えていかないとなかなか難しいと思っています。やはり人口が減れば経済規模を維持するには高付加価値の仕事を増やしていかなければなりません。理数系も含めてサービス業の比率が絶対上がりますから、そのような中でどうするかということです。人口を維持するために移民問題がどうなるかわかりませんが、高齢者、女性の活用ということは絶対に起こってきますから、今まで以上にそういった中で働いていくということを考えなくてはなりません。そのような中で高校のキャリア教育がどうあるべきかを考えていかなければなりません。やはり一番大切なのは社会を知る必要があるということです。学生の間は同じ価値観の仲間をつくって、そこで生活できます。社会に入ると違う価値観の人の中で目標、目的を共有しながら一緒になってやっていかななくてはならない。そういう仕事のスキルみたいなところはなかなか学校の中だけでは理解できないだろうと思います。そのためにインターンシップは非常に大切なので、小学校から高校になるにしたがってキャリア教育も進路指導みたいになってしまっていますが、やはり働くことと仕事をするこの違いをわかってほしいと思います。働くことは生きることと同義ですけど、仕事は役割ですから、こういう中で生きがい求めて自分の幸せをつくっていくという、行ったり来たりを自分の中でしなければならぬことがあると思います。そういうことをきちんと教えないとインターンシップで見る職業はわずかで、就職活動は今、エントリーシートを100社以上出すわけで、1つに絞っていくことはなかなかできない状況です。マーケットを勉強してきて、電通に入ったら経理に回されて「これは俺の仕事じゃない。」というような状況の話がよくあります。でもそういう意識ではなかなか働くことはできないものです。だからインターンシップをしながら座学でそういうことをしっかりと教えていくという仕組みをつくらないといけません。先生たちがそれをきちんと子どもたちに動機付けとして教えてくることが一番大切だと思います。インターンシップはもっともっと、特に普通科の比率というのは上げていかないといけません。職業を選択するために行くわけではありません。進学する人からすると、そんなことを高校からする必要はないということがあるかもしれませんが、やはり働くことの意味合いを学ぶという動機付けをきちんとしておかないといけません。私はインターンシップを義務化してもよいと思います。小学校の時からキャリア教育ノートなどをつくっていろいろやるわけですが、小さいうちは右だといえ右を向きますが、高校で自我ができてくれば、動機付けが必要です。だからそれをきちんと座学で教え込み、インターンシップへ行ったあとの話し合いで働くことの意味合いというものを一から教えていただきたいと思っています。

### <議長>

ありがとうございます。今言われたことも大学で教えている身からしても胸の痛いところですが、大学生が入学してきて、ガイダンスで必ず言うのは、皆さんはなぜ労働を4年間免除されているのかわかっているのかということ、これは4年間大学で磨いて、4年後に社会でいかに貢献するのかと、そのための4年間だと、そういう準備期間だということを言うのです。合格したばかりですが、一応言うようにしています。それから、高校生には大学入試の合格はゴールではない、その先何を学んで社会に貢献していくことが大事だということは申し上げています。どこで何を学んでどういうふうにかかしていくかというビジョンを高校の時に考えさせるような機会がないと、ただただ入学試験の合格のために勉強するという、そういうことの繰り返しになってしまうというのは残念だなと思います。

### <G委員>

中学校では、全ての学校がインターンシップとは呼ばずに職場体験学習というのを2～3日間実施しています。義務化と言ったらおかしいのですが、ほとんど全中学生が体験しています。私どもも出口指導、進路指導ではなく、このキャリア教育は生き方指導であり、一人ひとりの子どもたちが夢をもって生き抜いてほしいと考えて行っています。職場体験は2年生で行うことが多いのですが、1年生のうちには夢をもとうということをお教えます。また、この世の中はいろいろな人がいて支えてくれているということをお教えるために老人ホームへ行ったり授産所へ行ったりして福祉経験をさせます。その後2年生になって職場体験で2、3日、多いところでは5日ぐらい行っています。その時も、行くだけでは意味がありませんので、行く前には各自で職場調べをしていますし、さまざまな仕事がある社会の中でいろんな役割をもって、分担し合いながら助け合っているということを学習させて、しかもコミュニケーションが下手な子どもたちもいますので、きちんとコミュニケーションの取り方や、社会人としての責任の果たし方、ということをお指導して送り出しています。ただ、最近残念なことに、企業も経営が大変な中で、地元の中小企業や商店、福祉施設は職場体験に迎えてくれるんですが、なかなか大手の企業が迎えてくださらないので、もう少し広い社会を見せようと思ってもなかなか見せていただけないというのが悩みでもあります。中学校から送り出したあと、夢をもって社会で働いてほしい、生き抜いてほしいという思いがあり、中学生はそうのように職場体験を行っているという現状をご理解いただきたいと思います。

### <A委員>

今、職場体験学習という言葉が言われましたが、なぜキャリア教育をする必要があるのかという根本問題があると思います。私は、しなくてもよいのではと本音では思っています。高校時代に夢をもつのであれば、むしろ現場を知らない方がよい。いずれ死ぬのだから、もっともっと空疎で、あるいはもっとロマンチックなことを考えてくれた方が、将来彼らの個性が伸びるのではないかとさえ思っています。だからもし、キャリア教育なり職場体験学習の指導をするということを積極的に奨励するのであれば、他者がどう生きているかということであって、自分が夢をもつためでは全くないと思います。高校以下のキャリア教育は、それはまさに他者がどういう風にして苦しみを生きているのかということをお、むしろ夢を相対化するための職場体験、介護の現場などをしっかり見せるといったところに意味があると思います。つまり、一流企業を見るということではなくて、むしろ社会の一番厳し

いところ、厳しい現実を見せることに意味があるのではないかなという気がします。少しこの会議の趣旨にはあわないかもしれませんが、正直言って、夢とはつながらないと思います。

### <C委員>

子どものときに、確固たる夢をもつ人は一部だと思います。それで、ここまで生きてきて思うのは、夢と実際に生きるために働くこの世界の間を行ったり来たりする中で、小さな幸せを幸せだと思って生きていけないと、大きな幸せは来ないものですから、そのような生き方の体験をするのがこの職場体験です。その職場に行ったから夢ができるということは私も思ってはいません。でもそういう生き方のことをしっかりと体験しないと、夢も実現できないだろうと思いますし、実際はこうありたいと思うものを心に秘めて生きていくのが人生かもしれません。だからそういう意味では、大きく価値観の違う年代の人の中で自分がやっていかなければならないスキル等をキャリア教育やインターンシップで学んでいただきたいと思います。

### <B委員>

私は、基本的には職業教育というのは、どうやって仕事がなされているのかということを知ることだと思います。それ自体は非常に重要なことだと思います。できれば私もそういうことは知っておいたほうがよいと個人的には思っています。ただ、そういうことをいくらやっても、自分自身で物事を考えて、どういう問題があるのか、自分だったらこういう提案ができるなという、そういう考え方がないままに、いきなりその場に行って、こうやって社会は動いているのか、ということを知ったところで、その企業がやっていることについては批判もできませんし、企業に文句も言えません。やっていることについて、なるほど、ということをもって帰ってくる程度という感じで私は受け止めてしまいます。できれば、何が問題なのか、お客さんの本当のニーズを読み解けるような、そういう職業教育であってほしいという考えが本音のところにあります。それから、今からお話する内容は、愛知県民全員を敵に回すような話になると思いますが、私は2011年にこの地域に来たのですが、その2011年以降愛知県では何を見ても全然新しくないとずっと思っています。もっと他からはみ出て、チャレンジして行ってほしい、新しいことにいろんな観点から取り組んでほしいと思います。どこの組織に行っても、どういう会議に参加して、何をしても、基本的には前例踏襲というのがすごく重要な美德のようにになっているケースが非常に多いので、前例にとらわれずに、どんどんやってほしいと本音では思っています。例えば私は大学で教えています。高校の模擬授業に行ったり、その場で質問してもらったりしますが、提案してもらった内容が全然新しくないです。つまりそういう新しいことを考えるというのは、基本的には何が問題なのかということを知ることだと私は思っています。ですから、他からはみ出るということをもっと奨励してほしいと思います。背景にあるのは、そんなにがんばらなくても学生はみんな就職できてしまうということです。九州にいたときはみんな3月まで就職活動していましたが、愛知県では5月ぐらいでほとんど就職が決まっています。愛知県はすごいです。愛知県と静岡県はいつも就職できてしまう。そんなにがんばらなくてもよい企業に就職できてしまうというのが、ある意味少し残念なところでもあります。そんなに優秀な学生でなくても就職が普通にできてしまうので、彼らはあんまりがんばらないのだと思います。その背景になにがあるかということ、かつての愛知県民の人たちのがんばりだと思います。すごく新しいことにどんどん取

り組んできて社会全体を守るような形になってきたのではないのでしょうか。今の子どもたちを見ていると、既に社会ができて上がっているから自分たちがそんなにがんばらなくてもよいと感じているように思えます。あまり守りにまわり過ぎずに、どんどん新しい事やらせるような観点で職業教育を行ったり、彼らの個性を引き出していったりしてほしいと思います。

#### <議長>

ありがとうございました。たぶんこの中の8割くらいの方は地元の方だと思いますので、新鮮な意見だと思います。他にご意見があればどうぞ。

#### <H委員>

一つのエピソードをご紹介します。私、この4月に家に風呂釜をつけたんです。やってくれたのは、大学を出て2年か3年サラリーマンをやっていた方で、社長の父親が年をとってきたからということで戻ってきて仕事をやるようになったそうです。その息子さんにやってもらいました。風呂釜を設置してくれて、よくできた、てきぱきした息子さんだと思いました。その夜、風呂に入ったらびっくりしました。というのは、風呂釜からゴボゴボと湯の音がしたのです。驚くような音です。連絡をして来てもらった息子さんは、どこも間違いがない、ということで、悩んでしまわれた。そうしたら、付き添って来たもう一人の大工さんが、音がするのは当たり前だということを即座に言ったのです。詳細は省きますが、我々も小学校のときに習っていると思いますが、温度の加減で液体がどのように流れていくかということと関係があるということでした。つまり、現場で学んでいる人はしっかりと知識と知恵というのが結びついているということです。一方で、大学で学んできた人間には知識はあります。しかし、実際に生活の場面の中で役立たないというようなことがあるわけです。キャリア教育というのは、高校生も中学生も、一度それぞれ自分の興味をもったところで、現場へ出かけていくと、そこで何が問題かということをおそらくつかんで、そしてその問題をどのように解決できるのかということ学んでくるはずですが、確かに高等学校あるいは中学校の中で知識として学ぶことは、そのことに興味があればその勉強はおもしろいと思いますが、そうでない場合もあります。学んだ知識というのが、ふだんの生活あるいは社会や企業でどのように生かされているのかということをつかんで、再度、自分を奮い立たせるというか、学ぶ動機づけをしていくことができれば、これは大変価値があるのではないかなと思います。先ほども話が出ておりましたが、愛知県のほとんどの中学校が職場体験をやっておりますので、中学校と高等学校の取組がもっと結びついていくとよいのではと感じます。

#### <E委員>

少し恥ずかしい話と、誇らしい話をします。非常に恥ずかしいのは、5年ぐらい前ですが、よく勉強するクラスで理科がよくできる生徒がいました。私がたまたま授業へ行ったら、将来何になりたいのかと尋ねたら、会社員になりたいと答えました。だれも笑う生徒はいませんでした。私だけが笑ったというか、息をのんでしまいました。その生徒は今ある工業系の大学へ行ったらトップクラスの成績をとって、非常に一生懸命やっているというのを聞いたので、安心してはいますけども、これではだめだと思います。そういう意味では、インターンシップや、職場体験という何らかの形で社会を見せる必

要があります。単に、勉強なさい、この大学入りなさいという指導ではだめだということをつくづく思います。私は高校で働いていますけども、インターンシップは大体、事前指導・事後指導を含めて、1か月くらいの期間をかけてやっています。ふだんは授業に差し障りがあるので、夏休みにしかできません。最後は9月に一人ずつ報告をさせて、インターンシップに行った方に学校へ来ていただいて、彼らの報告を聞いて、またコメントしていただくというような形で、現在十数人やっています。

そこで次の話ですが、ある生徒が保育園に行きたいということで、どこか保育園を見つけてきて、そこへ行ってもらいました。男子生徒です。その頃軟式野球をやっていたのですが、行って帰ってきての報告会を聞いてびっくりしたのは、「働くということは覚悟をもつことだ。」と言ったことです。彼が言うには、「参加してみて自分は子どもと接するという仕事が合っていると思いました。ところが生涯の仕事として成り立つかどうかを考えてみたところ、園長先生くらいになると随分と給料は高いようだが、結婚しても生計がとても成り立たないということがよくわかった。」ということでした。彼はたぶん保育園で、「どれくらいお給料もらえるのですか。」と聞いてきたと思うのです。この生徒はもう卒業して、たしか保育の関係のところへ進んだと思います。そこまでやりきるには、夏休みなどの期間を徹底的に使ってやるということが一つあると思います。それからせっかく中学校でそこまでやっておられるのだったら、高等学校においてもそれを途切れさせないように、いわば義務化してやっていくというのもよいですし、その中で心に火がつく生徒もいるのではないかと思います。中学校の積み重ねを我々高等学校の立場で言えば、十分受け止める仕組みが必要なのではないかと思いました。

## < I 委員 >

まず資料の7については、愛知県では介護が必要になる人が15年で2倍になると思いますので、今後の学科改編のことで、福祉ですとか医療とかいうキーワードが非常に重要ではないかなと思っています。それから資料8の1のインターンシップ等に関しては、企業だけで受けるというのがなかなか大変です。地域活動ですとかボランティア活動ですとか、年齢が違う大人も含めて協力することで普通科などの数字を上げていくことも一つの方法として考えられるのではないかと思います。弊社でも長期のインターンシップを14日から2か月受け入れています。その場合、職業観ができていて覚悟がある人は受け入れられるのですが、職業観がぼんやりした人まで受け入れるということになるとすごく大変ですので、それは学校で指導したり、一日仕事を見てもらったりするなど、その人によって分けていただき、きめ細かく対応してもらった方がよろしいのかなと思いました。

## < 議長 >

どうもありがとうございます。今のところ、受ける側でも相手のレベルによって対応されるということは当然だと思います。議論としては、職業学科については、福祉に関するご指摘がありました。議論の時間が足りなくなりましたが、今、職業学科についてのご意見がもしあれば、2、3いただいてこの議論を閉じたいと思いますが、いかがでしょうか。福祉について将来非常に重いテーマになるということは、そこを増やしていく必要があるのではないかなというようなご指摘がありました。改編の点に関して、資料7の4に書いてある改編を予定しておられるということだと思いますが、

これはある種社会のニーズに合わせてということでしょうか。確かに福祉科というのがヒューマンケアも含めて入っていると思うのですが、これはどういう意見を皆さんからいただくとよいのか、お願いいたします。

#### <事務局>

資料7の4のところにありますのは、近年の学科改編をまとめたものでありますけれども、やはり時代のニーズにあうよう少しずつですけれどもこのように変えております。例えば本県としては初めての試みですが、平成25年、古知野高校に観光ビジネスコースという全く新しいコースを設けました。社会のニーズに合った学科、どのようなものを県立高校として今後つくっていけばよいのかということについて、さまざまな角度からご意見をいただきたいという趣旨で、参考の資料としてございます。

#### <議長>

それでは皆様ご予定があると思いますので、残念ですが議論は閉じさせていただきます。

この後の進め方について提案がございまして。今日は2つのテーマについて、次回は3つのテーマについて議論をさせていただきますが、その間にいただいたご意見を整理して、専門的な見地から集約して、基本計画について素案として反映させる目的でワーキンググループの設置が開催要項の中にございます。このようなワーキンググループの設置をご提案したいと思います。主に、特に現場の先生方を中心に、高校の先生、中学の先生を中心にワーキンググループの中で、今日のご意見を取り込んだ形で、素案の整理をするということにしたいと思いますが、よろしいでしょうか。委員の方については事務局に一任いただきたいと思います。そのような進め方でよろしいでしょうか。ご承認いただければと思います。

よろしいでしょうか。ありがとうございます。それでは今後ワーキンググループをつくってそこで結果をまたこちらに反映させていただくということでさらに協議を続けていきたいと思っております。本日は議長の不手際で少し時間が押してしまいましたけれども、いろいろなご意見、貴重なご意見をいただいたことに感謝申し上げます。これにて本日の協議については終了させていただきます。この後は事務局にお返しいたします。お願いします。

〔教育長閉会挨拶〕